

第8室

(1) 15:30～16:00 (2) 16:10～16:40
(3) 16:50～17:20 (4) 17:30～18:00

第8室(1)

高校英語科における道徳指導の可能性への模索

石川 佳浩（麗澤瑞浪中学・高等学校）

現在のわが国の学校教育課程では、「特別の教科道徳」という教科がある。そのため、小学校・中学校では「道徳」が特別に時間を取り、指導されているが、高等学校においては、多くの学校で道徳が継続的に指導されていないために、小中での学びを引き続き高等学校で深めるということができていない。せつかく小中で指導したものを継続的に指導していくためには各教科での指導が必要とされる。英語科においても意識的に道徳に関する話題を取り入れていくことが要請されるであろう。本稿では高等学校の「コミュニケーション英語」で使用される教科書“Crown”3学年分を題材にどのような話題が扱われているか列挙し、それらが道徳の継続的な指導に活用し得る題材かどうかを学習指導要領に記載されている道徳の内容項目に当てはまるかを中心に調査した。その結果、少なくとも3年間の全30 Lesson 中26 Lesson で道徳指導に活用し得る話題が扱われており、最も多く扱われているのは「国際理解、国際貢献」であることがわかった。さらに細かく見ると、国際理解題材は、1年次で2回、2年次で4回、3年次で2回出てきており、2年次で最も多く出てくることがわかった。一方で、教科書内で扱われる道徳項目の数では1年次が最も多く、中高接続が容易にできることがわかった。石渡（2018）で示された中学校教科書の「特別の教科道徳」を意識できる話題と本校で検討した高校教科書における話題を対比することで、中学校2年生では、自分の住んでいる町や学校を紹介するような「郷土に関する話題」というような具体性の高い話題が出ていた一方で、高校ではより抽象化の進んだ話題で想像力を働かせながら道徳を学ぶことができることが示唆された。

第8室(2)

第8室(3)

英文短編小説の読解に基づくディスカッションを通じた批判的思考能力の育成

児玉 恵太（椋山女学園大学）

本発表の目的は、日本人英語学習者の批判的思考力を育成するために文学を教材として用いる意義を検討することである。近年、英語教育では、語学力に加えて、より総合的なコミュニケーション能力を伸ばしていけるような指導が求められている。そのためには、単に英会話力や文法

力を伸ばすだけでなく、とりわけ大学教育においては多角的なものの見方、考え方を身につけ、それに基づいて自分の考えを表現できる、といったより高いレベルの批判的な思考力を育成することが重要だと考えられる。このような能力を育成する手段の一つが、外国語の授業で文学を活用することであるといえる。第二言語としての英語教育において文学教材をコミュニケーション能力の育成のために活用する研究は、1980年代前後から英米を中心に広く行われた (e.g., 高橋, 2015)。21世紀になると、文学は批判的思考能力の育成において有益な教材として欧米諸国の外国語教育において積極的に活用されるようになった (Kramsch & Kramsch, 2000)。近隣のアジア諸国シンガポールでは、第二言語としての英語教育において文学は探求心を養い、個人的または社会的な問題について検討し、曖昧さや複数の視点について質疑応答するという観点から批判的思考能力を高めるとして文学を用いた実践が広く行われている (Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore, “Literature in English Teaching Syllabus 2013)。しかし、日本の英語教育において、批判的思考能力を育むために文学を効果的に活用することについては、ほとんど議論されていないのが現状である。そこで本発表では、英文短編小説を用いて教室内ディスカッションを行った実践事例を基に、批判的思考能力の育成という観点から文学を使用する利点と、今後の英語教育における文学の役割について考察する。

参考文献

Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore, “Literature in English: Teaching Syllabus 2013”. <https://www.moe.gov.sg/docs/default-source/document/education/syllabuses/english-language-and-literature/files/literature-in-english-lower-secondary-2013.pdf>

Kramsch, Claire and Oliver Kramsh. The Avatars of Literature in Language Study. *The Modern Language Journal* 84 (4), 553-573, 2007.

高橋和子『日本の英語教育における文学教材の可能性』（ひつじ書房：2015年）

第8室 (4)

SNS X

学習指導要領（平成21年度版）下における高校英語教科書のアクティビティ内容の分析

杉浦 彩希（南山大学大学院生）

平成30年度の高等学校学習指導要領改訂により、複数の領域を結び付けた統合的な言語活動の実践や外国語でコミュニケーションを図る資質・能力を育成することが重視されている。とりわけ、「論理・表現」ではスピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション、まとまりのある文章を書くことを通じた発信力の重点的な強化が図られている。旧学習指導要領（平成21年度版）においても、同様に上記の5つの言語活動の実践が推奨されていた。発表者が当時使用していた教科書を改めて見直したところ、そのような活動を行う課題は存在したが、実際に授業内で全ての言語活動をした経験はない。本研究の目的は、学習指導要領で推奨されている授業モデルと実際に生徒が受けている授業内容の整合性を調べることである。

このために、学習指導要領（平成21年度版）で使用されていた文部科学省検定済み高校英語教科書のうち、「コミュニケーション英語Ⅰ」と「英語表現Ⅰ」それぞれ平成26年度採択率上位

5位のものと発表者が高校時代に使用していたもの、合わせて2科目12種類の教科書を1年次用と2年次用の2年分を対象とし、ディベート活動に焦点を当て、どのようなバックワードデザインや構成になっているか調査した。また発表者と同年代の公立高校出身の大学生を対象として、当時の授業形態に関して無記名自由記述式のアンケート調査を行い、先に挙げた5つの言語活動のうち、どのアクティビティがどのくらいの頻度で取り組まれていたか、授業における教科書の用いられ方や補助教材の有無について調査した。その結果、スピーチとまとまりのある文章を書くことは定期的に取り組まれていたが、プレゼンテーション、ディスカッション、ディベートはあまり取り組まれていなかった。また、ディベート活動のバックワードデザインについては、十分なステップが踏まれていないことが明らかになった。